緑のまきば
(1968, No.2)
No. 3
小金井緑町教会
小金井市緑町四丁目16-33
(電話○四二三-81-と九六一)
編集・発行人 山本圭一

説教

主の貧しさによって富んだ者

(コリントⅡ・8章1――9)

山本 圭一

Ⅰ

コリントはローマのアカイア州の首都であり、エペソなどと並んで最も繁営した都市であった。使徒パウロは第二伝道旅行のさい、コリントを訪れ、(使18章)二年近く滞在して、有力な教会を建設した。しかし繁栄の裏には道徳的な退廃があり、教会内に争いが絶えず、またその不倫な事件をも耳にしなければならなかった。パウロがエペソに三年間伝道に従事していた時、コリントから来たクロエの家の者によってこの苦々しい状況を聞いた。信頼した者に裏切られた時の悲しさ、信仰者といえども清算することのできない人間的な弱さ。彼の思いはこのコリントの教会の実情に打ちのめされていったに違いない。牧者パウロの憂いと熱愛が涙となり、祈りとなった。

しかし、彼はこの失われた教会を直ちに審こうとはしない。審きは神の御手のうちにあり、彼は従って人々に勧め、良心に訴えようとして涙する。

その時、パウロの心によみがえったものがあった。慰めに満ちたマケドニヤの諸教会の姿。失われた時に苦境のただ中で、惜しみなく彼を励ました貧しい人々の真心である。パウロはかって主イエスの直弟子ともいうべきエルサレム教会の指導者たちと会談した時、エルサレム教会の貧しい信徒たちのことを聞き、心を動かされ、助けのために募金を約したことがあった(ガラテヤ2章10)。パウロの伝道旅行の中でこのニュースはいくたびか語られ、訴えられたに違いない。そしてこれに応じた人々こそピリピやテサロニケの貧しい人々マケドニヤ諸教会の善意であった。「患難のために激しい試錬をうけたが、その満ちあふれる喜びは、極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て惜しみなく施す富となった」(コリⅡ8章2)。貧しさの中に教会の生命が涙とともに、あふれたのである。

Ⅱ

あのコリントの教会にみるいまわしい分争や不倫に対し、マケドニヤ諸教会の真実を示すこと自身、すでに不動の審判であった。神の恵みへの無限の感謝が言い表わされるところに、神の恵みそのものの証しが生れる。人はこの事実の前に立たされた時、自己の欠陥の深さを知らされて沈黙する。しかしコリントの教会とマケドニヤ諸教会にあるこのきわだった相違が何によって生れたのだろうか。それは両者の人々の善意・人間性・感受性に優劣があったからであろうか。決してそうではなかった。それはただ、端倪すべからざる人間の傲慢・罪が打ち破られていたか否かにのみかかっていたのだ。罪の悔い改めは日々に新たなものでなければ何の効果もない。われわれの心情や意志はただ自然に放置すれば、自己を求めるものに直ちに転落する。蜘蛛が獲物を求めてその網の真中にがんばっているのと同じように、あらゆるものを奪い取り、その血を吸わんためにこの世界の真中にうずくまっているのである。この見せかけの不義なる富か、何と人間を根底よりさいなみ、神と人より隔絶させていることよ。

Ⅲ

しかし「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによって富む者になるためである」(コリⅡ8章9)。あの賤しめられた人、防禦のない人、うまぶねのみどり子、十字架の人が異邦に赴いて、彼らの責を身に負って死し給うた。愛は人のために死ぬことを示し、その死は、われらの生の全領域を全く新しく改革した。キリストによって赦されて人ははじめて愛することを知った。主がおのれをきわみまで貧しくなし給いわれらのために仕え給うことによって、地に平和がもたらされた。だからわれわれは今、マケドニヤ諸教会のように召されている。そしてこれこそ、コリント人も召さるべき唯一の希望なのである。